

作物名：りんご

病害虫名：モモシンクイガ（学名：*Carposina sasakii*）

1 被害の特徴と診断のポイント

- ・ 果実表面に産卵し、幼虫は果実に食入する。
- ・ 幼虫の食入孔は針穴程度で、食入孔から液汁が出て乾くと果面状に白く残る。食入後、果芯へ向かうものと果皮近くを蛇行するものがあり、蛇行するものはスモモヒメシンクイの被害と類似する。



写真1 モモシンクイガ成虫

2 生態

- ・ 成虫の発生は年1～2回で、6月下旬から9月上旬まで連続的に出現する。6～7月が低温の場合は、年1回発生が多い。
- ・ 毛羽だった面やくぼみに産卵する習性をもつ。リンゴでは主にごくあ部に産卵し、こうあ部にも産卵する。モモでは果面全体に産卵する。
- ・ 産卵は夜間に行い、日最低気温が15℃以上の日が続くと連続的な産卵時期になる。夜温が低いと活動しなくなる。
- ・ 産卵後7～10日で孵化した幼虫は果実に食入し、20日程度経過すると果実から脱出して地表に落下する。休眠しない幼虫（年2回発生系統）は土中で夏まゆを作り、10～15日で羽化する。休眠幼虫（年1回及び2回発生系統）は地中に冬まゆ態として越冬し、5月頃地表近くに移動して夏まゆを作り蛹化し、6月頃羽化する。

3 防除方法

- ・ 成虫発生の6月下旬以降に定期的に薬剤防除を行い、発生を抑制する。
- ・ 交信攪乱剤（コンフューザー）を利用し、発生を防ぐ。
- ・ 有袋栽培で果実への産卵を防ぐ。
- ・ 成虫羽化期（6月～8月）に地表面散布を行う。
- ・ 多発時には被害果を摘み取り、7日以上水漬けにして幼虫を殺し、次世代・翌年の発生を防ぐ。
- ・ 県内の産卵盛期の平年値は6月第4半旬である。
- ・ 交信攪乱剤の利用が進んでいる。

4 出典

（1）参考文献

- ・ ひと目でわかる果樹の病害虫 第三巻（日本植物防疫協会）
- ・ 農業総論 病害虫防除・資材編5（農文協）
- ・ 日本農業害虫大事典（全国農村教育協会）

（令和5年9月改訂）